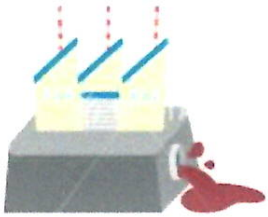
植柳の風

八代市立植柳小学校　校長室便り
平成３０年９月２５日　ＮＯ．１０７

のさり　～水俣病から宝物を伝える～

「これ、お店の前にある私たちの看板娘です。」
１８日(火)、体育館で行なわれた高学年児童を対象とする講演会の冒頭は、小さな可愛らしい女の子の看板を紹介することから始まった。来校いただいたのは、 社会福祉法人さかえの杜「ほっとはうす」の方々。胎児性水俣病患者や障がいを持つ方たちが通う共同作業所として２０年前に設立され、押し花作品等の自主製品の下準備作業や喫茶コーナーでの仕事などに取り組んでおられる。また、県の情報発信事業「水俣病から宝物を伝えるプログラム」として、水俣で何が起きたのか、今、何が課題なのか患者の方たちが、小・中・高校生たちに生の声を届けるため、県内はもとより、全国各地で情報発信活動を行っておられる。なぜ、宝物？それは、この水俣病という公害病によって得られた人権や環境、福祉の大切さという教訓を、けして負の遺産ではなく、地域の宝物として子どもたちに伝えるんだという強い思いが伝わってくる。

水俣病が発生した当時は、手足のしびれや体の震え、目や耳の障がいなど、原因がはっきりしない奇病とか伝染病と恐れられていた。昭和３１年ごろ、ようやく公式に水俣病と認められたが、まだ原因などはよくわからなかった。原因がチッソ工場から工場排水として海に流しだされているメチル水銀だと判明したのは昭和４３年。１２年間もかかったのである。



「胎児性水俣病患者の３人の方は、ちょうど校長先生たちと同世代。お母さんのおなかの中にいるときに、お母さんが食べた水銀に汚染された魚の影響で水俣病になってしまったんです。こんな悲劇は、二度と繰り返してはなりません。」と言葉に力を込めて語られる「ほっとはうす」代表の加藤たけ子さん。加藤さんは、もともと東京都の出身で、水俣病患者支援活動をしているうちに、水俣市に移住しこの「ほっとはうす」を運営されている方である。

３人の患者の方たちも、病気になって苦しかったこと、つらかったことを子どもたちに伝えられた。ふり絞るような声で、一つ一つ、かみしめるように。小学校に入学したのが１２歳だったこと、様々な偏見や差別と向き合ってきたこと・・・。しかし、今楽しみにしている趣味のことを聞かれると、嬉しそうに将棋を指すことや旅行のことなどを語られ、満面の笑みを浮かべられた姿が印象的だった。聴いている私たちもほっとする気持ちになった時間だった。奇しくも、今日から５年生は、集団宿泊体験学習で、芦北青少年の家や水俣病資料館等を訪れる。耳で聴いたことを今度は現地を訪れて、自分の目できちんとその目に焼き付けてきてほしい。水俣病を「のさり（方言で天からの授かりもの＝運命)」と言い、懸命に生きる胎児性患者の方たちやそれを支える人々。最後に、以前、資料館を訪れた時に見つけた詩を紹介したい。

人はボールを投げるために
後ろに一度振りかぶる
人は高く跳ぶために
下に一度しゃがむ
前や上を未来、後ろや下を過去だとすれば
人は未来のために過去を振り返る
ここに生きる希望を作るために